農業がおもしろくなる私の情報活用 2

単身赴任の無農薬イネつくりは、「ルーラル」が頼り

京都府福知山市　土日農業・高倉芳喜さんの場合

編集部

パソコンが農家の「農具」になってきた。農文協の「ルーラル電子図書館」（有料会員制）の農家会員も、ここにきて大幅に増えている。農家のルーラル会員を中心に、それぞれの「情報活用」を紹介する本コーナーの2回目。

高倉芳喜さん。露地のプール育苗で大助かり

お父さんが動けなくなって

月曜日、朝早くに家を出て電車に乗り職場に出勤。金曜日、夜遅く家に帰り、土日は田んぼの作業に打ち込む。

そんな土日イネつくりに励む高倉芳喜さん（四八歳）は、今、イネつくりが楽しくてたまらない。

少し前まで、お父さんとお母さんが、集落で一番多い面積の水田をつくりこなしてきたのだが、三年前、お父さんが事故で動けなくなり、奥さんが勤めにでていることもあって、芳喜さんが、二町五反のイネつくりを全面的に引き受けなければならなくなった。

そのうえ、職場の転勤も重なった。京都から大阪へ。京都なら福知山の自宅から通えたが、大阪で奈良県などでの仕事が多いため、家から通うのは無理。こうして、単身赴任の土日イネつくりが始まった。

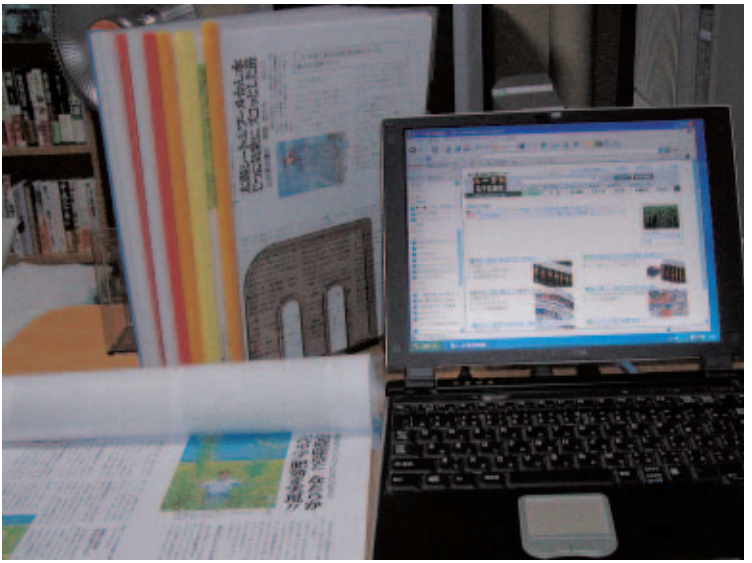
これまで、休日に田植えや草刈り、イネ刈りなどの機械作業を手伝うぐらいで、イネのことなど考えたことのなかった芳喜さん。「今、やれているのは、自分の作業をとめてまで助けてくれる近所の農家と、『ルーラル電子図書館』のおかげです」という。

電車の中で、プリントした記事を読む

「どうせやるなら、できるだけ農薬を使わないイネつくりをしよう」と芳喜さんは考えた。両親が汗だくになって農薬を

散布する姿を大変だと思ってきた。散布後の田んぼに漂う農薬の臭いもいやだった。農薬を規定の倍率に希釈するのも面倒そうだし、マスクや防除着を着ての作業もできればやりたくない。

農薬をできるだけ使わないイネつくりをするにはどうするか。インターネットでイネのことを調べていたら、農文協の「ルーラルネット」で「現代農業」のことを知った。バックナンバーの目次も見られるので、イネの記事を見ていくと、減農薬とか有機栽培に関する記事がたくさんある。これは役だちそうだと早速購読、そして「現代農業」で「ルーラル電子図書館」のことを知り、年会員になった。プール育苗や米ヌカ除草など、毎月届く雑誌に載っている技術について、もっと詳しく知りたかったからだ。



職場の寮で「ルーラル電子図書館」を見る。これはという記事は、カラープリントしテーマ別にファイルにとじる

二〇〇二年六月に入会。閲覧ページは一年目で二〇〇〇ページを超え、二年目も同じようなハイペース、ほとんどは「現代農業」のイネの記事だ。

「ルーラル電子図書館」は勤務先の寮においてあるパソコンで見る。仕事を終え、風呂や食事を済ませてからパソコンに向かう。眠気とたたかいながら一時過ぎまで調べることもある。これはという記事はカラープリントし、ファイルにとじておく。芳喜さんのカバンにはいつも、「現代農業」の当月号と記事のプリントが入っていて、電車の中で記事を見ることも多い。

月曜日から金曜日の間に、「現代農業」の記事を参考に作業の段取りを決め、土日に一気に作業をすませる。土日にパソコンを見ているヒマはない。

恐れ知らずに、どんどん実践

さて、芳喜さんは「ルーラル電子図書館」をどのように役だてているのだろう

か。それには、今、芳喜さんが取り組んでいるイネつくりを紹介したほうが早い。「ルーラル電子図書館」の記事を読んで、よかれと思うことは、恐れ知らずに、どんどんやってしまうからだ。

去年の秋には、自分でつくった米ヌカボカシ肥（EMボカシ）、それに岩塩二〇kgを振り、田んぼに混ぜた。本当は、福井県の藤本肇さんなど、「現代農業」で紹介されている冬季湛水をしたいところだが、冬は水がこないので、今はどうしようもない。一方ではレンゲ緑肥にも取り組み、「フーコ」の「探訪　レンゲ稲作の魅力と不安」の連載記事で勉強した。

太陽シートで出芽。床土には自分でやいたモミガラくん炭を混ぜる

春、種モミを塩水選して播種。床土には、「現代農業」を見てドラム缶でやいたモミガラくん炭を混ぜる。播種は九〇g播き。本当は稲葉光國さんの記事にあるように、四〇g播きをしたいという。

播種後は太陽シートをかけて出芽させ、その後はプール育苗にする。パイプハウスの場所を使っているが、ビニールはかけずに露地状態。「現代農業」には「露地プール育苗」の記事も載っていて大いに参考になった。お父さんの介護もあるお母さんが、ビニールの開け閉めやかん水を行なうのは無理がある。露地のプール育苗なら、プールの水が減ってきたとき、蛇口をひねるだけでいい。まさに、土日イネつくりにぴったりのやり方で、しかも病気がでにくくしっかりした苗になる。その苗を、田植え機を改造して坪五〇株の疎植で植える。

薄播き・薄植えで初期はさびしい。むらにはこんなイネがないので、お母さんが心配する。「今連載している、赤木さんの〝への字〟の記事にあるように、疎植やへの字は、家族との闘いです」と芳喜さんは笑う。

除草は油カスをEMで発酵させたボカシを使っている。手元に米ヌカが少ないこともあり、肥料も兼ねて油カスボカシを使っているが、除草効果は高いという。防除は、無農薬田では、木酢やEM活性液を基本にする。農薬とちがって濃度の面倒な計算は必要ないし、少々やりすぎても作物がなんとかしてくれる。マスクもいらない。「おおらかで、それでいて自分で考える楽しみがある」と、芳喜さん。

去年は多少イモチ病がでたが、大きな被害にはならなかった。収量は地域の平均ぐらいではないかという。今年は収量をきちんと把握するつもりだ。

四反歩の無農薬米は友人・知人一〇名に直売している。今年は、無農薬の田んぼを一町まで増やしたいという。値段は一〇kg四〇〇〇円、安いしうまいと好評。もっとも、慣行のイネと比べて本当にうまいか、自分では自信がない。収量や食味を云々するのは先の話、まだまだ「ド素人」だという。

作業に合わせて一晩一テーマ

「現代農業」の記事は、当面する作業にあわせて、キーワードを入力して調べることが多い。塩水選、太陽シート、プール育苗、米ヌカ除草、疎植、深水など、およそ一晩一キーワードで記事一覧を出し、どんどん見ていって、役だちそうな記事をプリントする。プール育苗の記事だけでも、一〇年以上前の記事から最近の記事まで、四、五月で一〇〇ページを超える記事を開いた。

記事をどんどん開いていくのは、記事のなかの写真を見たいからでもある。実際のようすがわかるし、カラー写真で初期がさびしいイネの中期の変わりようを見ると、うれしくなる。

「農業技術大系」でも、「作物編」の目次をたどり、イネの巻のカラー写真を見ていった。浅水と深水、密植と疎植の生育のちがいが生育段階を追って紹介してあり、ますます確信を深めた。福島の薄井勝利さんの「疎植水中栽培」の写真もあり、その豪快なイネの姿に目を奪われた。

電子は、忙しい兼業農家のためにある

「いずれは、農業一本で、やっていきたい」と芳喜さんはいう。

今の会社は五〇歳で退職、その後、別会社で一〇年働いて定年になるが、六〇まで働く気はない。とはいっても、高校生と大学生の二人の子どもにしばらくは金がかかる。サラリーは欠かせない。それに「サラリーがあるから冒険ができる」という。農業に生活がかかっていると思ったら、危ないことはできない。サラリーのあるうちに、いろいろ試してみて、それから第二の人生を迎えよう、というわけだ。

そんな芳喜さんを、「ルーラル電子図書館」に結集した先輩農家の知恵が応援する。忙しい兼業農家にとって、電子の威力は大きい。機械があるから兼業でイネつくりができ、電子があるからイネつくりが面白くなる。

米ヌカ、油カスなどでつくるボカシ肥。これを秋に岩塩といっしょに田んぼに散布した